



社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会

2017/12/1 No.76

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

望みの門と木下記念学園と私



児童心理治療施設
望みの門木下記念学園

園長 西山 信男

十七年前、転職を考えていた私は、愛隣幼稚園の木下勝世園長から、望みの門新生舎の作業指導員という職を紹介され、何の予備知識もなく「福祉」も知らずに、初めての富津の地で、木下ドーラ先生の面接を受けました。望みの門学園、楽生園、紫苑荘、そして採用された新生舎の四つの施設で構成される「のぞみ会」に入職が決まった瞬間でした。

障害者の授産施設の仕事は、未知の世界で戸惑いと驚きの連続・連続。それでも、毎日通う若い利用者の笑顔と、朝早くから遅くまで働く職員の励みで、自分の心身が健康で、充実の日々を過ごしたことを思い出します。配属早々、バザー準備で荷物運びの時にシェルター下で、木下弘人先生から「君は、誰か。」と言うように、じっと見つめられたことも、懐かしい思い出です。

爾來時を重ねて、地域福祉に長く夢中になり、もっと地域福祉をと思っていた昨年夏、

木下記念学園に異動になりました。情緒障害児短期治療施設の法律が出来て五十五年、本来は県が運営すべき施設を、関東では千葉県だけに計画がなく、「子どもと家族そして地域だけが取り残されてしまう。何とかしよう。」という法人の強い想いが込められて、万難を排してスタートした施設です。

キリストの教えに基づき、開設された望みの門木下記念学園は、悪戦苦闘している間に設立一年七ヶ月が経過しました。この施設は、心理的な治療が必要な子どもを受け入れ、心身ともに安心・安定した養育、専門的な心理治療を行う場として千葉県では初、全国では四十五番目の児童心理治療施設です。（定員は入所三十名、通所五名）

東京湾の穏やかな気候、真っ赤な太陽・青い海・緑深い大地で子ども達との生活が実り多いものを生み出すと信じてスタートしたのですが、我々職員の子ども達への理解不足、施設の未熟さから、困難の連続でした。試し行動や、自傷他害、破壊、自殺企図等々の対応に職員一人一人が疲弊し、身体的・精神的に追い詰められた期間が、長く続きました。現在入所している子ども全員が服薬し、毎週精神科医か小児神経科医に来院いただき、数人は遠方の主治医にも一か月に一度、通院しています。最近になってようやく椅子に

座って、先生と言葉でのキャッチボールが可能になった子どもがいます。また、君津特別支援学校湊分教室の教職員からは、適切な学校教育がなされています。未だ心理治療が、十分の活用には至っていませんが、富津地域の温もりと、のぞみ会全体の協力、職員の失敗から学んだ支援力（奉仕）で、これまでの難事を乗り越えてきました。

木下記念学園は、医療・心理、教育、福祉の三分野が連携し、生活全体が治療のための構造になっています。残念ながら軌道に乗るまでに、まだまだ時間を要すると思いますが、子ども達に応じた治療・教育・支援を通して、子ども一人ひとりの成長を願い、我々は安心安全な施設運営を行って参ります。

東京望みの門 自立援助ホームマナの家 ホーム生と映画観賞会

生活指導員 山崎 仁美

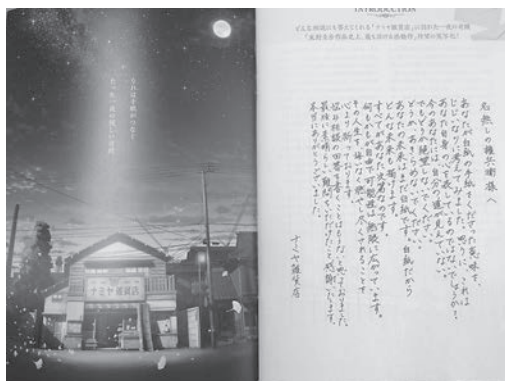
十月中旬にAさんと「ナミヤ雑貨店の奇蹟」を観に行ってきました。皆、シフトが違うためそれぞれが行ける日に職員が同行しました。

この映画は、養護施設出身の青年三人が強盗を働き、思わぬアクシデントでかつて悩

み相談と的確な助言で有名だった

「ナミヤ雑貨店」に身を隠すことに。身を潜めるなか、

廃屋に過去からの手紙が届き、雑ながら、自分達の考えなどストリートな返事を送る。その手紙の数々が結び付き、奇蹟が起こるというストーリーでした。一緒に観に行ったAさんは、初めから終わりまで、さまざまな場面で涙をポロポロ。映画が終わってもしばらく席に座り「とても感動した。最後に三人が…」など話しながら、零れ落ちる涙を拭いていました。二人でランチを食べている時も映画の話で盛り上がり、感動を共有。どの場面が一番感動したか尋ねると、最後の手紙の部分が…と話し始めました。最後の手紙は白紙で送った青年達へ、雑貨店の店主からの返事。その内容は、「地図はまだ白紙。目的地を決めようにも、道がどこにあるのかわからない状況なの



でしょう。白紙では誰でも困り、途方に暮れるのは当然。だけど、白紙なのだからどんな地図でも描ける。全てはあなた次第で、何もかも自由、可能性は無限大。自分を信じて、人生を悔いなく燃やしつくされることを祈っている。」という内容でした。この言葉に「気持ちいが軽くなり、ほっとした。

過去や今のことで苦しくても、誰かのちょっとした言葉で助けられたり、自信がついたり。自分の言葉で人の人生が変わったり。人との繋がりにいろんな奇蹟があるんだ。」と話すAさんの瞳は穏やかであり、そして、過去や今の辛い気持ちなどから自分を立たせるために、自分の未来のために頑張ろうという意思がありました。「人は誰かと関わることで生きている」そんなことを改めて感じさせられました。今回、Aさんと感動を共有、同じものを観て、同じように感じあえた奇蹟に幸せを感じるひと時でした。

婦人保護施設 望みの門学園

千葉県教会音楽祭に参加して

生活指導員 佐藤 早恵

九月十八日、千葉市民会館大ホールで開催された千葉県教会音楽祭に参加しました。



例年、手話と歌を披露しています。が、今回は歌唱により力を入れて臨むということで、木下勝世副理事長にご指導いただけました。私自身、手話の経験が殆どなく手話をしながら歌うなどできるのだろうかと内心不安に思いました。

演目は「まぼろしの影を追いて」「人生の海の嵐に」の二曲です。練習は六月から始まり、今年も鈴木洞子先生に手話をご指導いただきました。「人生の海の嵐に」は昨年も歌いましたが、より伝わるように手話を変えたり顔の表情を加えたり、直前まで優しく丁寧に指導くださいました。

七月からは木下副理事長による歌唱指導も始まりました。歌の練習では腹筋を使って発声すること、息つきや強弱、声をのぼすことなどユーモアを交え楽しく教えてくださいました。さらに今回はソプラノとアルトの二部

合唱という初めての試みもありました。中盤から練習は毎朝の連絡会後に行い、仕事で参加出来ない人は夕食後に希望者を募って一緒に練習に励みました。

練習中には張り合って吠えるような声を出す人がいたり、手話の手が左右逆になったりソプラノ・アルト双方につられたり：という場面もありました。繰り返し繰り返し直前まで練習を重ねてきました。

音楽祭当日は好天に恵まれました。私達の出演は第二部の休憩後でした。皆、緊張した面持ちです。たとえ間違えても堂々としていればいいのよ、と練習中に笑い飛ばしていた自分もステージ上ですっかり緊張してしまいました。練習中の部屋と違い、声が吸い込まれていくようで夢中なまま二曲が終わりました。

音楽祭が終わりロビーで先生方に利用者より花束贈呈。みんな良い笑顔でした。本当にありがとうございました。そして今回を機に、月に一度引続き歌唱指導をしていただけたことになりました。来年は第五十回の記念音楽祭ということ、気持ちをひとつに合わせてまた頑張りたいと思います。



養護老人ホーム 望みの門 楽生園

楽生園の職員として

事務員 斉藤 愛実

今年の四月より望みの門楽生園の事務員として採用され、早いことにもう半年がたちました。私は、こちらに入職するまでなかなか介護にかかわる機会がありませんでした。事務員として施設に配属されて介護の現場に関わっていく、いろいろと学びのある半年となりました。

入職した当初は右も左もわからない中で慣れない事務作業を覚えることに必死で、利用者の方々と接する時間もなかなか取れず、名前と顔を覚えることもままなりませんでした。高齢者施設での事務員としての業務、利用者とのかわりなど、すべてが初めての



ことで不安や心配がありました。

また、ご高齢の方々とあまり接する機会がなかった私は、職員としてどのように利用者と接していけばいいのが戸惑いを感じている部分もありました。しかし、そんな疑問や不安があったとき、先輩職員の皆さんに尋ねるといつも親切に快く教えて助けていただけました。また、利用者の方々から「もう慣れた?」「元気?」といったように事務室に声をかけに来てくれたことがとてもうれしかったのを覚えています。

ひと月ふた月と楽生園で過ごす日々を重ね、利用者の方々と交流していくと、「あなたを信頼しているからね」といった言葉を頂けるようになりました。段々と利用者の顔と名前も覚えていき、「事務員の斉藤さんよ、いつもお世話になってるの」と面会にいらっしゃったご家族の方に紹介していただけたりと、少しずつではありますが利用者との信頼関係を築くことができているのかなと感じております。

まだまだ日々悩むことはありますが、先輩職員の方々に相談しアドバイスをいただきながらこれからも楽生園のいち職員として日々頑張りたいと思います。



特別養護老人ホーム 望みの門 紫苑荘

アンケートを実施して

生活相談員 渡辺 由佳

紫苑荘では年に二回（四・九月）に利用者様に対してアンケート調査を行っています。

今までは全利用者様に対してアンケートを行っていましたが、『はい』『いいえ』『わからない』で答える質問であっても、特別養護老人ホームという性質上、全ての方が質問に答えられるという訳ではなく、意思疎通の図れない方の回答を『わからない』とした為、アンケート結果を分析しても全体像が把握出来ずにいました。

それを解決するため、今回の調査は意思疎通の図れる方を対象に行いました。紫苑荘には特養五十名、短期入所十名の利用者様がいらっしゃいますが、今回の調査では二十二名の方に協力頂きました。

質問内容は「食事は美味しいですか?」「お風呂は気持ちよく入れますか?」など十一項目です。上記の二つの質問は施設で暮らす高齢者の方の生活の中の大きな比重を占める楽しみだと思えますが、施設では自分で食べたい物を食べられなかったり、お風呂も好きな時間に好きなだけ入れないので、多くの

方が満足しているかと答えて下さりほっとしました。中には「味が薄い」「もっとゆっくり入りたい」などの厳しいご意見も頂きました

が。全利用者様に満足のいくサービスを提供するのは難しいと思いますが、一人でも多くの方に満足していると言って頂けるサービスを継続して提供していけるように全職員が一丸となり取り組んでいきたいと思えます。

また「施設の中で楽しみはありますか?」という質問もさせて頂きました。団体生活をしている利用者様には施設内で楽しみを持つというのとはなかなか難しいと思っていましたが、半数以上の方が答えて頂けてとても嬉しかったです。

楽しみの内容は「みんなと話をする」「家族の面会」「レクリエーション」など様々な意見が聞かれました。意思疎通の図れる利用



皆様はご家族の面会を楽しみにしていたり、趣味を楽しまれている方も多いですが、アンケートを実施していない意思疎通の図れない利用者様の楽しみは少ないと想像が出来ます。そのような方への楽しみの提供は職員の働きかけ(レクリエーションやスキンシップ、コミュニケーションなど)で充分に補っていききたいと思います。

特別養護老人ホーム 望みの門 富士見の里 地域共生社会に向けて

副施設長 飯田 篤史

富士見の里がオープンしてから、ちょうど五年が経ちました。安定的な施設運営をこころめてこれたのも、京葉後援会の皆様、各種ボランティアの皆様、職員、ご家族、地域の皆様のおかげだと思っております。本当にありがとうございます。私自身も、ご利用者、ご家族様とのかかわりの中で日々成長できていると感じています。

施設サービスとして、できる限りお客様の希望には応えていきたい、そのために各部署に負担をかけることもあります。

私自身、この五年間で最も変わったことはリーダーとして行動する覚悟ができたことが

あります。

組織風土は意識して作り上げていかなければいけない、そして、組織というものは適切なリーダーシップがあれば易きに流れやすい性質がある。

施設長と共に富士見の里を牽引していくには、私自身が人一倍学び、人格と洞察力を磨いていかなければ職員はついてこないと考え、これからも勉強していく所存です。

のぞみ会は社会福祉法人です。もちろん売り上げも業績ですが、それ以上に利用者満足度が業績、お客様からの施設や職員に対する評価が業績、地域への貢献が業績だと思っています。

今後、富士見の里としては利用者の方々を笑顔にする取り組みはもちろんですが、地域のために何かできないかを考えていきます。機関紙をご覧いただいている皆様の中に、



地域に向けた取り組みについてアドバイスいただける方がおりましたら、参考にさせていただきたいと思っておりますので、ご連絡ください。宜しくお願いいたします。

老人デイサービス事業 望みの門 デイサービスセンター
体を張ってレクリエーションを頑張ってます!!

生活相談員兼介護員 萩野 恵

今年の三月から望みの門 デイサービスセンター配属になり早八ヶ月が過ぎようとしています。追われ業務になってしまっている事に日々反省しながらも毎日頑張っています。デイの職員は未経験者が多く何もかも一からでした。特にレクリエーションは「何をやればいいのか?」「何が楽しめるの?」と疑問だらけで見様見真似で毎日行っていました。経験があっ



でも正直毎日のレクリエーションを考えるのは大変です。「この間これやったよね」「これ盛り上がったよね」と盛り上がったものを繰り返し行うマンネリレクリエーション状態に陥ったこともあります。

レクリエーション等が載っている月刊誌を購入していますがきちんと読んだり読まなかったり：(笑)一人が読みだすと何故か他の人も読み出すという面白い現象が起こってみたい。そこでレクリエーションを見直し「どうすればいいのか」「何をやるのか」を話し合い・意見を出し合いました。みんなでやろう・みんなで考えようとなり担当はありますが、「二人で何もかもやらなくてもいいよ」とみんなで担当を支える事で不安を取り除くようにしました。体操も他の業務に就いている職員も手を止めて参加し、職員全員で声を出して行うことで自然と担当職員も利用者様も声を出すようになりました。やはり職員が体を張って前に出ないと利用者様も不安に感じ前には出てきてはくれません。

利用者様だけが楽しむレクリエーションでなく職員も含めて全員で楽しむレクリエーションという考えになったことで職員の気持ちも楽になり、笑い声が増えてきたと思います。誰かがやるのでなく全員がやる・声を掛け合う・団結する：仕事をしていく上で大事

なことだと思っています。まだまだチームワークが未熟なデイサービスですが、他施設に負けない明るい笑顔でこれからも体を張って頑張っていきたいと思っています。



介護支援専門員 松本 幸恵

二月に入社して早八か月が経ちました。今迄もケアマネとして勤務経験がありました。が、この富津にきてご利用者様と馴染みやすく、今も楽しく働いております。

日頃の運動不足と気分転換の為、十月に房総の山では珍しい鋭い岩峰を持っている伊予ヶ岳に登りました。「房総のマッターホルン」とか「千葉の妙義山」「安房の槍ヶ岳」などの別名もあり日本中の天狗が山頂に集まり会議を開いたという天狗伝説もあるそうです。



季節の花々が咲き、野鳥がさえずる雑木林の道をどこか懐かしく感じ、日頃の運動不足も手伝い苦しい道のりでしたが、頂上を目指し頑張って登ってきました。

頂上付近はロープを頼りに山頂へ向かい、鎖で囲まれた荒々しい南峰の山頂に立つと、房総半島のなだらかな景色と豊かな自然が広がりとて美しくかったです。

自然にふれることで、心が安まり癒され気持ちりが洗われるようでした。

私の今の活力源は豊かな自然に触れることです。日々の生活の中で、色々悩んだり思い詰まることもあります。自分の気持ちが満たされていると、気持ちにゆとりを感じられ、何事にも動じずに頑張っていこうと思えてきます。これから紅葉が楽しめる季節なので、また休日に自然を探しに明日からの元気をもらってきます。

就労継続支援事業 望みの門新生舎

秋晴れの地域交流スポーツ大会

職業支援員 鈴木 良子

地域交流スポーツ大会と言えば毎年雨に見舞われることが多く、天候を心配しながらの行事となっております。開催日が近づくにつ

れてやはり今年も雨予報……。今年は前日の午前中に開催延期を決定し、担当施設である新生舎としては迷うことなく当日に向けての準備がスムーズに展開できました。

さて、何年か振りの秋晴れの中での地域交流スポーツ大会の開催です。

のぞみ会の特徴として、乳児から高齢者の方までの総合施設であることから年齢層も厚く競技種目も様々で見ている方々も楽しめるスポーツ大会でもあります。子供達の愛らしい姿に癒され、若い利用者さんの活力に元気を貰い、老人の方々からはまだまだ頑張れる力を頂けるとても有意義な時間でもあります。自然に応援にも力が入り、「頑張れ〜！

危ない！気を付けて」と：

思いは様々ですが競技を通して秋晴れの天候のごとく晴れやかな気持ちになりました。

近隣の皆様のご理解のもと、またご参加頂いた来賓・



家族会の皆様のご協力があったこそ、地域交流スポーツ大会が毎年開催されていることに感謝致しております。多くの競技のご参加に際しても合わせて御礼申し上げます。来年度も秋晴れの開催を願うと共に、業務の忙しい中ご協力下さいました職員の方々に感謝致します。



管理者 三幣 知子

今年の四月長年勤務していた職場からヨカデイに異動となり早くも半年が過ぎてしまいました。ヨカデイを利用されている皆さんの中には以前一緒に作業をした方や顔見知りも多く温かく迎えてくれました。

ヨカデイの一日は午前中に入浴、午後は曜日によりレクや創作活動・カラオケなどプログラムが組まれています。もちろん健康のため毎日体操も行います。利用者さんの平均年齢は六六・八歳、利用者さんの半数が七〇歳を超えています。皆さん年齢を感じさせないほどパワフルです。

ヨカデイに異動後暫くはいろいろな手続き等に追われ利用者さんと一緒に日中活動

をする時間があまり取れませんでした。それでも時間をみつけては利用者さんと活動するようにしていたのですが、事務所で仕事を始

めると普段気にならないような小さな事を訴えてくる利用者さんや、世間話をしにくくなる人、何でもなく声を掛けていく人など、入れ替わり立ち替わりやってきます。特に仕事が溜まっているときに……。

利用者さんは敏感です。自分では普段と変わらなく接していても自分たちの方を向いていないということを表情や言葉などから感じ取っているようです。こちら側がイライラしているとトラブルが多かったり、穏やかな気分していると皆さんも笑顔であったり。考えすぎかもしれませんが皆さんの中にもこういう経験はありませんか。

毎日穏やかに常に笑顔で接することが一番ですが、難しい時も正直あります。そんな時



こそ落ち着き笑顔。明るく元気なヨカデイであるためにも、まず私から頑張ってみようかなと思います。

富津市富津地区地域包括支援センター



管理者兼相談支援員 花澤 光洋

「はじめまして！」九月一日より、大先輩である前任者／門馬さんより引き継ぎ、地域包括支援センターに着任しました花澤です。至らぬところが多々あると思いますが今後とも宜しくお願い致したく、ご挨拶の代わりとさせていただきます。

私が、のぞみ会に入りましたのが約六年前となり、最初に配属となったのが望みの門在宅サービスセンターです。その時の管理者が門馬さんでした。自分が介護支援専門員の端くれとして門馬さんに面倒を見て頂いたことを思い出します。「望みの門」という初めてくぐる門をご案内して下さいました。それから月日が経過し、社会福祉士として再び新しい門である地域包括支援センターへの扉を開けてくださったのが門馬さんとなります。不思議なご縁があるような感じがします。門馬さんが築き上げてきたもの、その門の傍らに

少しでも花を添え、彩れるように今後とも頑張っていきたいと考えています。

ノーベル文学賞作家であるアンドレ・ジイドの作品の中に「狭き門」があります。このタイトルはキリスト教の聖書にあるマタイ福音書七章十三節／ルカ伝十三章二十四節から由来されたものとされています。「力を尽くして狭き門より入れ」ことを為す時に簡単なものを選ぶより、困難な道を選ぶ方が自分自身をより高めることになる」というこの言葉の意味を噛みしめ、肝に銘じるように思う今日この頃となっています。



児童養護施設 望みの門かずさの里

里に就いて思うこと

児童指導員 網崎 久美

「どんなに虐待をされても、家に帰りたいからいない子どもはいない」

昨年の夏、面接を終えた車の中での戸波施設長からの言葉です。里に就いて一年と少し、その言葉の意味がじわじわと感じられます。「もっと子どもと長くかかわる仕事をした」と前職を辞めて児童養護施設への就職を決めた私ですが、夏休みから入職したこともあり右も左も分からない状態、子どもと笑って遊ぶことからのスタートでした。今では、子どもたちの思いに触れる機会が増えてきています。トラブルで大泣きした後「家のほうがよかった」と話す子ども。面会のみで一度も帰省できず家庭での想像をたくさん話す子ども。かずさの里は措置施設のため望んで来ている子どもはいません。

ライフス

トリーを通して説明を受けている子どももいます。が、きっと各々が「どうしてわたしはここで生活しているのかな」「これからの生



活はどうなっていくんだろう」と漠然とした疑問を持ちながら暮らしているのだろうと思います。

ふとした会話の中で、じつくりと対話をする中で、里での暮らしを余儀なくされている子どもたちの葛藤を感じられるようになってきました。

二年目となった今は、こうした思いを抱える子どもたちにどうかかわっていくべきか、難しさも感じています。

一般家庭で育てられてきた私と、それぞれの事情で幼いうちから里で暮らすことになった子どもたち。どんなに想像しても、本当の意味で子どもたちを理解することはできません。トラブルを起こす背景に何があるのか、今何を考えているのか、想像しながら言葉掛けをする毎日です。

指導員としてどのようなかわり方をするか、まだまだ経験の浅い私には迷ったり困ったりする場面ばかりです。それでも先輩職員に相談したり、一緒に考えてもらったりすることで少しずつ前進できているのかなと感じています。

一職員として更に経験を積んで、かずさの里で子どもたちが安心して生活できるよう貢献していきたいと思っています。

乳児院 望みの門 方舟乳児院

公園デビュー



保育士 榎本 一代

十一月の暖かい日、二歳未満の子供たちで君津の公園に出かけました。この日は近くのお母さんと子供たちも沢山来ていて遊具や砂場は子供たちでいっぱいでした。車から降りた方舟の子供たちは思い思いに歩き出し、遊具や滑り台で遊んだり砂場にいる初めて見るお友達をじっと見ていたりと反応は様々でした。ボールやシャボン玉を出すと子供たちは夢中で追いかけてまわっていました。この日、二歳になった幼児室の子供は電車で図書館に出かけました。途中、商店で自分の食べたいものを選びそれを持っていました。

今年、方舟ではいろいろな取り組みをしています。アンパンマンミュージアムにお泊り



で出かけ、時間を気にせず思い切り遊んだり帰りはフェリーに乗ったり。ご飯を食べるファミレスに出かけたり。

今までだったら方舟の車でお弁当を持って「遠足」という形が主でした。でも、お家にいる子供たちなら「みんなで遠足」ではなくちょっとした「お出かけ」をしますよね、というのがきっかけでした。施設の中でも自分の好きな玩具が何時でも手が届くようになっていて自由に取り出せるようになっていたり、お二階に行って遊んだり。天気の良い日にはお庭でお肉や焼きそばを焼いて食べたり。

今方舟では、施設にいて安心・安全に過ごさせなければと思うあまり制限がいきすぎていないか、日々成長の過程において知る（体験する）機会が少ないのではないかと考え始めました。そこで、お家にいる子供たちならばどんな風に過ごすのか、一般家庭に近い「普通の暮らし」とは？ 職員同士で話し合いながら取組んでいます。もちろん安心・安全、子ども達の体調管理はしっかりと守っていかなければいけません。そのうえで出来る限りの体験・お家に近い環境を整えていこうと考えて様々な取組をはじめました。方舟は施設です。でも、そこに暮らす子ども達にとってはお家です。今日も子ども達の元気に遊ぶ姿と笑い声が方舟に響いています。



相談支援員 斎藤 美紀

風邪を引いた。我慢できるぐらいかなと思
い仕事に行く事にしたが、思うように動けな
い。他の職員にも病院に行くように勧められ
早く仕事を上がらせてもらった。病院の待合
室には、予防接種を受けにきた乳児や、顔色
の悪い中学生、腰の痛そうなおばあちゃんな
ど、いろいろな人がいた。先生が小さな声で
名前を呼ぶ。診察室に入ると、子どもの頃か
ら知っている先生の顔。子どもの頃の記憶が
一瞬重なる。先生は私に具合を尋ね、喉を
見たり、首

にそっと手
を当てたり
する。「これ
は辛いわね」
と言われた
とき、私の
中で小さな
子どもが泣
き出した。
もちろん、
実際にそう



したわけではない。私の中で、私が叫ぶ。先
生、そうなんです、辛いんです。

私は今辛いことを、誰かに証明してほし
かった。誰かに辛いねとわかってもらいた
かったのだ。熱もなく、咳があまり出ない風
邪。自分で運転することだって出来る。どう
にか仕事にだって行ける。ただ自分が弱いだ
けではないか、ただ怠けたいだけではない
か、他の人だって風邪を引いても仕事をして
いる。そう思い、風邪で仕事を休む自分は
いけないと思っていた。

でも先生に「辛いわね」と言われた瞬間、
私はこれが欲しかったのだと思った。風邪で
弱っていたのは身体だけではない、心もだと
思った。

適切にSOSを出すことは難しい。相談を
聞いていると、同じようなことで悩んでいる
親御さんがたくさんいることを知る。でも、
同じように見えても、その一人ひとりが抱え
ている問題や辛さはみんな違う。SOSを上
手に出せる人もいれば、出せない人もいる。
私は病院の先生の「辛いわね」を聞いたとき
ほっとした。仕事を途中で上がらせてもら
い病院に行くことにした自分の決断が、この
SOSが、怠けではないと思えたからだ。
自分を責めていた自分から解放された瞬間
だった。たった十分足らずの診察で、すべて

包み込んでもらったような満足感があった。
私が目指す相談は、これなのではないかと
思った。

編集後記

小春日和の一日であった。十月は雨の日が
多かったので殊更に嬉しい。

富士山頂は既に白い。今月十二月からは障
害者週間である。新生舎には四十名が利用
毎日通所している。障害者と言い健常者と言
う。開設されてもうかれこれ二十年近く経つ。

当初二十名の知的障害者通所授産施設で
あった。現在は就労継続支援事業所として
四十名が日々生産に従事して収益は本人に還
元されている。と言っても平均一万二〜三千
円で、その金額だけ考えれば労働意欲が失わ
れよう。そこで働く皆さんは、毎朝「今日も
元気にマイクロで、共に来るのは新生舎！自
立を目指し働こう。」と朝会で合唱し、製パン・
製菓、手芸、機織、園芸、畑作、そして二町
歩に及ぶ稲作に元気に従事している。

休耕田の活性化、そして地域農協スーパ
ーを通じて販売促進等地域に親しまれ、貢献し
ており、なくてはならない存在となっている。
まさに「人はパンのみにて生きるにあらず」
を地で行っている。

(Y・I)